

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

付論

日米の博物館との連携をいかしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践：

グローバル化教育と多文化教育の結合可能性
(学習プログラムの開発と実践)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 森茂, 岳雄, 中山, 京子
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00002067

日米の博物館との連携をいかしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践

—グローバル教育と多文化教育の結合可能性—

中央大学文学部 森茂 岳雄

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校 中山 京子

1. 本研究の意図と課題

2000年は沖縄からのハワイ移民100周年にあたり、ロサンゼルス全米日系人博物館 (Japanese American National Museum) の巡回展示「ベントウからミックスプレートへ—多文化ハワイの日系人—」が11月10日から12月9日まで沖縄県立博物館で開催された。^①

本研究は、全米日系人博物館、沖縄県立博物館と連携・協力し、その巡回展示を活用して沖縄の子どもたちが、日系アメリカ移民の歴史的経験やハワイにおける多文化共生の現状についての理解を深め、今後多文化化の進展が予想される日本における民族共生について共感的に考える総合学習の教材開発と授業づくりを行った。そして展示の開期中に那覇市の小学校や児童館の児童生徒を対象に授業実践を行い、その成果と課題をふまえて、次の巡回展示にむけての修正単元を提示することを意図するものである。

カースルズ (S. Castles) とミラー (M. J. Miller) は、現代を「移民の時代」⁽²⁾と呼んだ。国連人口基金が1993年に発表した『世界人口白書』によれば、1992年における国際間の移住民、すなわち自国以外に住んでいると推計される人口は約1億人に達し、世界人口の約1.7%に達している。この「移民の加速化」の現象は我が国においても顕著である。法務省の発表によると、1999年末、我が国の現在の外国人登録者数は、総人口の1.2%にあたる1,556,113人に達した。日本で外国人登録者数がはじめて100万人を超えたのが1990年であるので、1990年代は世界中から毎年平均して5万人以上の人々が移民し、日本で新たに生活を始めた計算になる。

一方逆の視点からみると、日本もかつては移民大国であった。開国早々の百数十年前、日本は生活の道を求めてハワイや北アメリカ本土に多くの移民を送った。その後も中南米、東南アジア、中国大陸等へ多くの日本人が移民した。かつて貧しく人口の多かった日本は、つい30～40年前まで移民の送り出し国であった。そのような歴史的経緯の中で、現在も250万人以上の日系人が海外に生活している。

しかし、これまで日本の学校教育において、日本から海外に出ていった日系移民や、日本に移民してきた外国人の歴史的経験や現状について、教科書をはじめ授業の中で取り上げられることはほとんどなかった。⁽³⁾ 日本の近代化の黎明期に多くの日本人が海外に移民した事実、彼らとその子孫の歴史的経験、そして現在の海外日系移民の現状や生き方を共感的に学ぶことは、これからの多文化社会を生きる子どもたちにとって「共生」に向けての資質を養う上で意義があると考えられる。

そこで、全米日系人博物館の展示が沖縄をはじめ、今後日本各地を巡回するのを機に、日米の博物館と連携・協力して展示を活用した単元開発と実践を行った。この意味で本研究は、学校教育と博物館の国際的連携・協力の新たな可能性を探る試みでもある。また、展示のテーマである日系移民についての学習は、ヒトの国境を越えたグローバルな移動とそれに伴う世界的な規模での相互依存関係を考えるグローバル教育と、一国家（地域）内における多文化の共生を考える多文化教育の結合の可能性を探る試みでもある。この点が本研究の特色である。

2. 巡回展示「弁当からミックスプレートへ」の象徴性

この巡回展示のタイトル「弁当からミックスプレートへ」は多文化社会ハワイに生きた日系移民の文化や経験の象徴である。⁽⁴⁾ ハワイでは、プランテーションに従事するために集まってきた様々な国からの移民の交流によって、歴史的に独自の文化が形成された。特に、食文化はその象徴的な事例である。砂糖キビのプランテーションに従事した初期の日本人移民は、毎日の昼食に下段ご飯、上段に簡単なおかずの入った二段重ねのアルマイト製の弁当箱を持参した。プランテーションで働く労働者には、ハワイの先住民に加えさまざまな国からの移民も多く、彼らは共に昼食をとる間に自然に互いに持ち寄った食べ物を交換し合うようになった。例えば、フィリピンのバンシット麺、ポルトガルのチョリソー・ソーセージ、プエルトリコのバステレ・ポーク、中国のチョイサム（キャベツ料理）、韓国のカルビー、琉球のアンダギ・ドーナッツ、そしてハワイ先住民のロミロミ（魚料理）などである。やがてこの経験が、さまざまな国や地域の郷土料理を一つの皿に盛りつけた「ミックスプレート（プレートランチ）」と呼ばれるハワイ特有の食文化を誕生させた。このような食文化の融合は現在まで受け継がれており、ミックスプレートはハワイ料理のレストランにおいて代表的なメニューの一つになっている。

このミックスプレートは、まさに今日の多文化社会ハワイの象徴表現である。すなわ

ち、ハワイでは、移民が持ち込んできた様々な文化や価値観と先住民やアメリカ本土のそれらが接触、変容して新しい独自の文化が生まれた。それを一般に「ローカル」と呼んでいる。本展示では移民当初から今日のローカル文化が生まれるまでの日系人の歩みを、写真、ビデオ、工芸などの展示を通して紹介している。

3. 博物館と連携した教育プログラム開発の概要

全米日系人博物館では、全米学校プロジェクト(National School Project)を設け、初等・中等学校における日系人学習についてのカリキュラム開発⁽⁵⁾やカリキュラム実施のための教員研修を実施している。本展示についても、ハワイの委員会によって授業案や教材を含む教育キット⁽⁶⁾が開発されている。しかし、これはあくまで、アメリカ（主にハワイ）の児童生徒を対象に開発されたものであるため、それをそのまま日本の学校の文脈の中で使用することはできない。そこで、このキットを含めアメリカで開発された日系人学習の教材や授業案の検討をもとに、日本の文脈で実践できるプログラムの開発を行った。

その際、展示を主催する全米日系人博物館とプログラムの内容や方法について一年をかけて意見交換を行った。また、日本人の児童生徒が読める日系人の歴史についての適切な日本語の読み物がないため、教材としても使える日系アメリカ人史に関する簡単なブックレット⁽⁷⁾の作成も行った。

沖縄県立博物館とは授業実施に向けて地元の学校や児童館との調整を初めとして、展示期間中におけるプログラム実施の具体的可能性について協議した。沖縄県立博物館では、本教育プログラムについて、「ハワイ移民100周年記念特別展『日系移民1世紀』展に係わる教育プログラムで、博物館教育と学校教育の密接な連携を試みるためのものである。従来、博物館事業は、展示活動を中心とするものであったが、近年の地域学習や生涯学習の中でその社会教育施設としての多様な役割が求められている。このたび、当館では教育プログラムの先進的な全米日系人博物館の協力を得て、初の本格的な学校と連携した博物館の教育プログラムを実施し、展示のより一層の理解の促進および展示の背景にある歴史的・文化的なものを含めた総合的な学習を試み、博物館と教育関係団体の有機的関連をめざす契機とする」⁽⁸⁾とし、この展示を地元沖縄での博学連携の契機としてとらえている。

一方全米日系人博物館では、沖縄での巡回展示が日本の学校教育の中でどのように活用できるのか、その可能性を探るパイロット・スタディと位置づけている。そのため沖縄からの移民を中心にした単元開発になったが、それをふまえ、最終的には今後日本各地を巡

回していくことを踏まえたより一般的な修正単元の開発をめざした。

4. 沖縄県立博物館での先行実践とそこから導き出された課題

沖縄での実践においては、学校と博物館と我々支援者がどのように連携をとることが可能かさぐるために、形態・内容の異なる二つの実践を行った。一つは、総合的な学習の時間の中で博物館を活用した那覇市立城東小学校での実践であり（実践1）、二つは、博物館の中での体験的活動を主とした那覇市立大名児童館の児童生徒を対象にした実践（実践2）である。以下に二つの実践の概要を述べる。

1) 実践1

a. 実践の概要

本単元「世界に広がるウチナーンチュ」は、那覇市立城東小学校の協力を得て、6年生4学級を対象に平成12年11月17日から11月30日の「総合的な学習の時間」において実施した。本単元開発は、城東小学校第6学年担任、沖縄県立博物館指導主事と全米日系人博物館から教育プロジェクト開発・実践の協力依頼を受けた我々の共同で行った。

単元目標は、次の大きく二つである。

(1)「移民の学習」を通してわたしたちの暮らしが世界の人々と深く結びついていることに気づき、同じ地球に生きる人間として、協力しあって生活することの大切さを理解する。

(2)博物館での見学を通して、自分の学習課題について、自ら進んで学ぼうとする態度を身につける。

本単元は全9時間扱いで実践し、我々は実施前の本校での打ち合わせの後、電子メールを通じて授業の進行について相談し、授業においては最後のまとめ・表現の4時間に2日間にわたって参加して、実際に子どもたちの活動を支援した。

b. 課題

本実践において、最後のまとめの活動としてグループごとに学級全体の前に出て模造紙を中心に新聞形式にまとめたものを読み上げるという活動を行った。子どもたちには「発表しなければならぬ」雰囲気があり、「発表したい」「友達の発表を聞きたい」という気持ちまで高まっていなかった。「何を仲間に伝えたいのか」「どうやったら効果的に伝えられるか」ということがわからないまま子ども自身を「発表しなければならぬ」状態

においこんでしまったことに原因があったようである。

我々が子どもたちのまとめ活動に関わったとき、まとめる方法に悩んでいる子どもたちに対しては、子どもたちとの会話を通して二つの支援を試みた。すでに興味関心が一つのテーマに集約されている子に対しては、それについての細かい質問に詳細に答え、そのことについてのみ発表ができるような情報を十分に示した。例えば、衣食へ興味を持っている子に対して、ミックスプレートができるまでの話と着物から農作業着や洋服に変わっていく様子を詳しく話し、文化変容に焦点化した発表を支援した。また、わかったことがたくさんある中で何を発表したらよいかわからない子どもたちに対しては、事前に製作しておいた日系移民の歴史的経験を物語る紙芝居を見せた。そうすることで、子どもたちは自分に関心をもったテーマについて、自分の解釈を含めながらストーリーラインを組み立て、視覚的に訴える発表をすることができた。

c. 子どもの感想

実践後に子どもたちの自己評価を深めるため、また子どもたちの感想を知るために記述式のアンケートを行った。（子どもたちの感想のいくつかは、資料1-1に示した。）「今まで世界の歴史などそういうことに興味はなかったけど、この学習をして移民の事がよくわかりました。そして世界の歴史についてもっとしらべる気になりそうです」という感想から、沖縄から世界にわたった「移民」という人の移動を通してグローバルな視点を育てていることがわかる。「特にハワイ移民がとてもきびしい労働をしながらも、賃金を母国に送ることを怠らなかったことがすごいと思いました」という感想から、移民した人々の力強い生き様を子どもが実感していること、「移民は日本語が通じないのにそれを乗り越えて自分達の言葉をつくっていったところがすごいと思った」「ハワイ、日本の文化が混ざり、いろんなものや言葉ができたことにおどろきました」というようにハワイにおける異文化交流や多文化の共生の姿に気づき、またその他の感想から自分の環境に置き換えて考えた時に異文化をもった人を受け入れようとする姿勢が育っていることが読み取れる。

2) 実践2

本実践は、子どもが博物館展示に主体的に関わって日系人に関する学習を深めるための具体的活動の開発や支援の方法を探ることを目的として、那覇市立大名児童館の子どもを対象に沖縄県立博物館で行った。

まず、来館した子ども（小学生7名、中学生7名）を展示室内スペースに敷いたござに

誘導し、そこで100年前のハワイの砂糖きびプランテーションで働いていた初期移民時代の農作業着を子どもとの会話を進めながら実際に着せていき、移民当時の具体的イメージをもたせ、博物館活動への意欲を高めた。その後、子どもが展示を見ながら、こちらが用意した6つの活動「ミニ本をつくろう」「Q&Aをカードつくろう」「フォトアクティビティ」「ハナハナウエアを着てみよう」「世界に広がるウチナンチュマップをつくろう」「ハワイのいろいろな言葉を調べよう」から自分で自由に選択して活動を行い（表1-2）、最後に本時の活動をふりかえるために紙芝居を見せた。

学校の博物館見学にありがちな、玄関ホールで見学の約束事や説明を聞いて展示室内は自由見学にするというスタイルは、興味関心があるものを子どもが自由に見ることができるといふよさがあるが、全体をざっと見て満足する状態で終わることや、ただ展示に付けられた解説をノートに写すだけの活動で満足してしまうことが多い。子どもが興味関心を寄せたものを見る「自由」を保障しつつ、主体的に展示に関わって学びを深められる手だてとして、用意した活動がどうであったか検討したい。

「ミニ本をつくろう」「Q&Aカードをつくろう」「世界に広がるウチナンチュマップをつくろう」の活動には主に中学生が取り組んだ。展示内容に対して自分なりの課題意識を持てる発達段階の子どもに適した活動であるようだった。一方、小学校中学年の子どもは「ハワイのいろいろな言葉調べ」に取り組んでいた。展示の中で用意されているカードから自分のワークシートに書き写す作業を通して、「ハワイにはいろんな国の移民が来て言葉が混ざったことがわかった。」という言語変容を視点にした文化理解を深めた。

城東小学校の実践では、担任の教諭は「最初、課題を見つけられない子がいて困った」と繰り返言っていた。社会事象をテーマにした展示であるから、子どもの発達段階から見ると当然のことかも知れない。しかし、本実践のように子どもの思考を促すような活動を用意することでそういった問題は解決できるのである。例えば、「ミニ本をつくろう」「Q&Aカードをつくろう」「フォトアクティビティ」はあらかじめこちらがテーマ内容そのものを限定したものではないが、作業を通して自分の関心あることを表現することができ、思考を深められた。また「ハナハナウエアを着てみよう」「世界に広がるウチナンチュマップをつくろう」「ハワイのいろいろな言葉を調べよう」は課題を最初に示しているが、そこを窓口に子ども自身が気づきや思考を深めていくことができる。博物館内でのこれらの活動について、子どもたちは「博物館でこのように活動したことは初めてだったけど、いろいろな事や物が展示してあることがわかって、よい機会だった」「小さい本を

つくりました。面白く見学ができて、すごく得をしたなあと思いました。今日ここに来てよかったと思った」と述べ、充実した気分で博物館を出ることができた。

3) 二つの実践からみえた課題

a. 教材研究の支援

本巡回展示を活用して学習を進める時、主な授業者である教師は一般に日系移民の歴史について精通しておらず、日系移民に関する参考書を入手しようとしてもどのような図書があるのかわからない。そこで日本語で読める文献リストを示した上、全米日系人博物館と共同で作成した日系アメリカ人の歴史についてのブックレットを資料として添付することにし、児童図書を授業に使用可能な資料として紹介した。授業者の教材研究を尊重する観点から、著書・児童図書・資料などを情報として紹介するにとどめ、必要に応じて希望があればこちらから指導者や子どもたちに貸し出すようにしていた。ゲストティーチャーとして子どもの学習に我々が関わる時間が多くとることが可能ならば実践場面における教師や子どもへの専門的知識の支援が潤滑に行うことができるが、物理的に可能性は低い。これからの「総合的な学習の時間」の運用については、これまでの学習内容が教科書としてあらかじめ与えられたような時間ではなく、子どもと教師が実態に応じて学習を作っていくものであるとすると、本来ならば子どもと直接学習場面をつくる授業者独自の教材研究を期待したいところだが、その負担を軽減しより子どもの学習が活性化するように、資料、図書を授業案とともに実践校に提供することが必要であるという見解を得た。

b. 実践のための組織づくり

教材研究の支援に関連して、直接子どもと授業を行う実践校と巡回展示会場の博物館と全米日系人博物館、及びそこからの依頼を受けて教育プログラムの開発や実践に協力した我々の各々が互いの立場を理解し合いながら、どう連携・協力していくかという組織づくりが実践の成功を左右する重要な鍵となることが本実践から明らかになった。

5. 修正指導案の提案

5.1. 沖縄実践の課題をふまえた修正点

先に実践実施にいたるまでの課題について述べたが、ここでは単元構成そのものの課題に触れ、三つの視点から沖縄での指導案を修正をし、次の展開に向けての指導案を提案する。

まず第一の改善点は、博物館見学時には子どもに積極的に働きかけ発見を促す活動を仕組むことである。先行実践においては、子どもが自由に博物館を見学するようにしたが、その結果、展示から自分の学習の視点を見いだせなかったり、展示内容と十分に関われなかったりした子どもがいたことは先に述べた。しかし、大名児童館の子どもたちを対象にした博物館活動の実践で明らかになったように、展示に子どもが積極的に関わり子どもの思考を促す手だてを用意することによって、同じ展示でも子どもの学びが深まる。本提案では、このことをふまえて指導案の中に大名児童館の実践で開発した活動を含めることにした。これはワークシートを中心に対応することができるが、担任及び博物館学芸員、展示ボランティアの支援があることが望ましい。

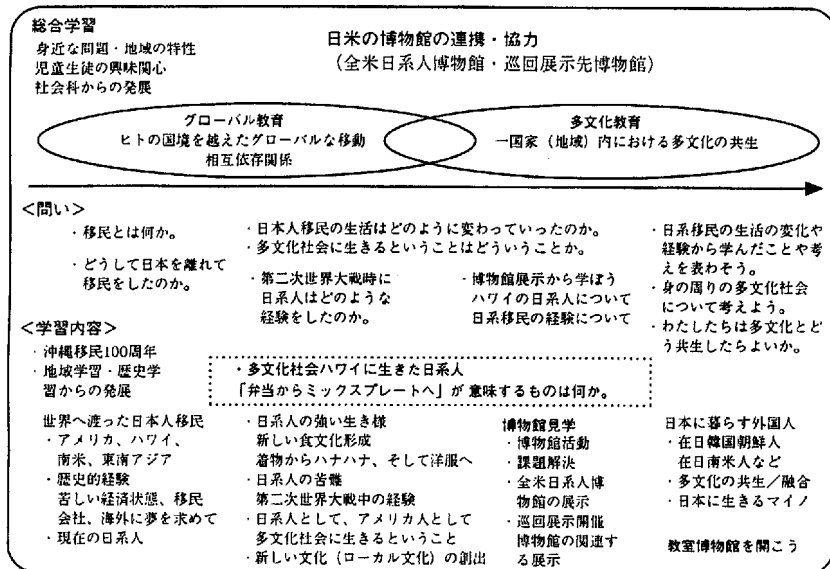
第二に、城東小学校の実践では博物館見学後にまとめの新聞づくりをして発表し、単元を終了したが、提案する修正単元では「多文化共生」への視点を指導計画に含めた。子どもがこの展示見学から多文化共生への姿勢を育てていることは城東小学校の子どもが「移民の意味を聞いた時は、どうして移民したんだろう、移民をしたら楽だったのかなと不思議な気持ちでした。でも、学習をして初めて移民はとても苦労していたということを知り、あらためて移民の大変さを知りました。（中略）私が移民をしたら差別をせずにふつうに接してほしいし、近くに移民してきた人がいたら、ふつうに接していきたいと思う。」と述べていることから明らかである。この視点を発展させて、子どもの身近な地域で進展しつつあるこれからの多文化社会を生きる子どもたちに「共生」に向けての資質を育てたい。修正指導案では、世界各地に生きる日系人の経験、現在その子孫が日本に在住している事実に加え、在日韓国朝鮮人、アイヌ人もにふれながら、日本の多文化社会について考える時間を6・7時間目に設定した。

第三に、単元の最終段階に学んだことを総合的に自由に表現し、かつ博物館での学習活動経験を生かすために、「教室博物館づくり」を設定した。城東小学校では新聞にまとめて発表という形式をとったが、1枚の新聞を共同で作ってそれを読み上げる形式では、子どもが感じたことや学んだことを十分に表現できていなかった。博物館づくりをすることにより、子どもたちは展示の構成を考え、学習全体を振り返る場になる。また、日系人の経験について絵本や物語で表現する、あるテーマを設定してインタビュー集を作りビデオ放映するなど、子どもが伝えたい内容、方法を制限せず、その子のよさが生きる自由な表現活動が保障されるようにしたい。見学だけでなく博物館づくりという視点で子どもが再び博物館展示にかかわることによって、学びの場を広げることができると共に、保護者に博

物館見学への参加を呼び掛け、教室博物館づくりにへの出展も保護者に呼び掛けるなど、「総合的な学習の時間」の取り組みを示すなど、学びの場をより総合的に開いていくことも提案したい。

以上の視点をふまえて構想した単元図が以下の図である。

<図>全米日系人博物館巡回展示を活用した教育プログラム開発におけるグローバル教育と多文化教育の結合



尚、沖縄の実践では沖縄とのかかわりを重視して教材開発・指導案づくりを行ったが、今後の日本各地での巡回を考え、以下に提案する修正指導案では、より一般的なものにした。巡回先での実践についてはこの指導案に地域と日系移民という教材の関連を踏まえた資料などを活用して、授業づくりを進める必要がある。

5.2. 修正指導計画

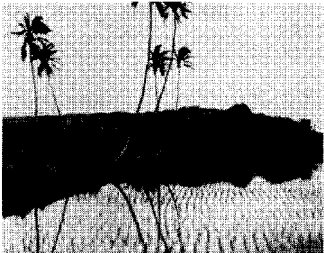
単元名：ハワイに渡った日系移民—弁当からミックスド・プレートへ（全9時間）

対象：小学校高学年以上 領域：「総合的な学習の時間」及び社会科

目標：

- (1)約120年前、日本からハワイへ多くの人が移民したことや移民の歴史的経験について知るとともに、多文化社会ハワイに生きた日系移民の生活の変化や人々の願いについて考え、そこから現在日本で進展している多文化化について自分の考えを深める。
- (2)ハワイ日系移民について、博物館展示、資料、博物館学芸員などへの聞き取りなどから調べ、調べた過程とそこでの自分の考えを適切な方法で表現する。

単元指導計画：

過程	予想される学習活動・内容	指導上の留意点・資料
1 時	●写真から考えよう この写真はいつ、どこのものであろう。 ＜写真1＞ 1885年 ・着物をきているから江戸時代。 ・山中で暮しているのだろうか。 ・お釜で調理している。 ・場所はよくわからない。 ・貧しそう。  ＜写真2,3＞ ・広い田んぼがある。 ・後ろに移っているのは何の畑だろう。 ・水田の後ろに移っている山を見たことがある！ ・もしかして、ハワイ？ ・ハワイでお米を作っていたの？  ●日本人移民について知ろう。 ・ここがハワイだなんて！ ・100年以上前にこんなに日本人がいたなんて知らなかった。 ・旅行に来たようには見えないけれど、どうしているのか。 ・日本からそんなにハワイに行っていたなんて知らなかった。 ・どこの県から行った人が多いのだろう。 ・移民とはどういう意味か。いつ頃から移民をしたのだろう。 ・1924年までにハワイにこんなに日本人が移民していたなんて知らなかった。（資料2-1） ●どうして日本を離れて移民をしたのか。 ・ハワイに行ってみたくと思ったから。 ・外国で夢をかなえたいと思ったから。 ・日本にいるよりいいくらいがでできると思ったから。 ・明治政府が移民をすすめたから。 ・移民会社があったから。大きな都市にはの移民会社の営業所があった。（資料2） ・経済的に苦しくて少しでも楽になりたかった。 ・地元で移民を斡旋した人物について考えよう。	・2枚の写真を見やすいように拡大して提示する。 ＜写真1＞1885年、ハワイ・ホノルルの千人小屋で調理をする日本人女性「そこではやわらかな砂に掘った穴の中で燃える火にかけた風変わりな美しい形の器で、料理が行われていた。この人達は肉を食べず、魚を主として食べている、米を主食とするが、野菜を好む。」（デイリー・パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー、1885年2、10） ＜写真2＞ダイヤモンドヘッド付近の水田（1910年頃） 現在のハワイの観光パンフレットなどにあるダイヤモンドヘッド周辺の風景を対比して示すとよい。 （写真1、2共『図説ハワイ日本人史：1985-1924』1985年より転載） ・導入時に提示する資料は、授業実践地域と深く関わる写真や資料が用意できたらよい。巡回先の地域にあわせてその地域性が生きるように本指導案も加筆修正していく必要がある。 ・日系移民の経験についての全体像をとらえるために、教育キットに含まれる紙芝居を活用することもできる。 ・日系ハワイ移民史に関しては、王堂・フランクリン他『図説ハワイ日本人史』ビショップ博物館、1985年、今野敏彦編著『移民史Ⅲ』新泉社、1986年、鳥越皓之『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社、1988年、A.T.モリヤマ『日系移民史学』PMC出版、1988年、高木真理子『日系アメリカ人の日本観-多文化社会ハワイから-』淡交社、1992年、沖田行司『ハワイ日系社会の文化とその変容』ナカニシヤ出版、1998年参照。
2 時	●日本人移民の生活はどのように変わっていったのだろう。 ＜ベントウからミックスプレートへ＞ ・「カウカウ」とはハワイ語で昼食を意味する。カウカウタイムはプランテーションのランチタイムのこと。日系人もカウカウタイムと言っていた。 ・ハワイにはどんな人達がいたのか。 ・カウカウタイムを通してどんな国際交流がすすんだのだろう。 ・日本人は昼食としてアルミ製の2段重ねの弁当箱を持ち、下の段に白いご飯、上の段に日本のおかずを入れおかずの交換をしていた。	・移民、官約移民などについて子ども向けの資料として、坂井俊樹監修『国境をこえた人々の歴史』ポプラ社、1999年参照 ・アルミ製弁当箱を教育キットや写

	・農園の他の国からの移民とおかずを交換しあって、食べ物の交流がすすみ、現在のハワイの「ミックスプレート」になった。これには必ず白いご飯がついている。 ・日本人は自分たちの食べ物を変化させていったんだね。 ＜着物からハナハナウエア、そして洋服へ＞ ・最初の頃の写真ではみんな着物をきていた。 ・野良着を日本風から「ハナハナ」（藁帽子、かすりジャケット、股引ズボン、たび）スタイルに変えていった。どうしてこのような服ができあがったのだろう。（資料2-3） ・街の中で洋服をきるようになった人も多かった。学校に通う子どもはほとんど洋服をきている。 ●日系移民の生活や変化、それについて自分の考えをまとめよう。	真から提示する。ここでは様々なエスニック料理が一つの皿に盛り込まれていく、食文化の融合が進んだ象徴としてとらえたい。 ・授業案「ペントウからミックスプレート」の教育キットを教室に準備し、労働着など実際に子どもが手にとって見たり着たりできるようにしておきたい。その他、初期のハワイ日系人に関する図書や写真などを用意しておく。 ・バーバラ・F・川上『ハワイ日系移民の服飾史』平凡社、1999年参照
3時	●第二次世界大戦時日系人はどのような経験をしたのだろう。 ・日米対戦時、日系人はどんな生活をしたのだろう。 ・差別されたときにどんなことを考えただろう。（資料2-4） ・日本に帰ってきたのか。そのままアメリカにいたのか。 ・日本生まれの移民とアメリカ生まれの子どもは、どちらを自分の国と思ったのだろう。 ・強制収容についてどう思うか。（資料2-5） ・日系人の子どもたちはどんなことを考えたのだろう。 ・ぼくが二世の子どもだったら、。。。 ・日本兵になった兄と米兵になった弟の苦しみ。 ・戦争は人を苦しめる。 ・戦後日系人はどうしたのか。アメリカはどうしたのか。 ●日系移民の生活の変化や戦争時の経験について、自分の考えをまとめよう。	・日系人の経験に関する児童図書を紹介したり、読み聞かせをして戦争中の日系人の経験について事実を伝える。（M.O.タンネル&G.W.チルコート著、竹下千花子訳『トパーズの日記ー日系アメリカ人強制収容所の子どもたち』金の星社、1998年、ケン・モチヅキ著、ゆりよう子訳『かこいをこえたホームラン』岩崎書店、1993年） ・二つの国の間に挟まれた日系人の願いを切り口に戦争をみつめたい。帰米二世、日本在住二世の経験を話をしたい。 ・戦後の日系人の補償運動とアメリカ政府の対応について説明する。
4・5時	●日系人博物館展示「ペントウからミックスプレートへ」の見学に行こう。 ・自分が知りたいことについて詳しく見てこよう。 ・博物館の活動をして発見した！ ①本を作ろう（ミニテーブルがある展示ブースなど） 本づくりを通して展示を見た自分の思いや知ったことを表現する。 ②Q&Aカードづくり（展示場全体） 展示から関心をもった項目について、自ら問いをたてて調べてQ&Aカードにまとめる。 ③フォトアクティビティ（展示場全体） 一枚の写真から日系移民の経験をさぐり、その写真についての説明を書き、その作業を通して対象人物を共感的に理解する。 ④ハナハナウエアを着てみよう（労働着展示ブース前） 労働着を実際に着てみるにより移民当時の労働条件を共感的に理解する。 ⑤世界に広がる日系移民マップ作り 地図作りを通して日本から世界に渡った人々のことを知り、その広がりや移民の力強さを実感する。 ⑥ハワイのいろいろな言葉調べ（展示場全体） ハワイの言葉の中には日本をはじめとする諸外国からの移民の文化の影響	・各時間の学びの足跡をポートフォリオなどに保管し、子ども自身が学習したことや自分の考えを振り返ることができるようにしておくことで、単元最後の表現活動への支援につながる。 ・博物館活動においては、事前に研修を受けた引率教員の主導ですすめるか、博物館学芸員の主導ですすめるか、事前に十分に打ち合わせをすることが必要である。 ・前時までの学習の様子から子どもの興味や関心がどこに集まっているのか把握し、見学に行く前に博物館学芸員の方と話す場をつくり、短い

	を受けていることをワークシートに記入しながら知る。 ・展示を見ながら活動をして作品ができた。 ・博物館の人やボランティアの人に詳しく教えてもらうことができた。 ・豊かな暮らしを夢見て移民したのに、今の日本みたいに豊かではない暮らしをしていたことがわかった。 ・ハワイに行っても、日本の思い出や文化を大事にしていたことが伝わった。 ・日本らしいところを残しつつ、他の民族の文化も取り入れてハワイにあった生活をしてきたことがわかった。 ・戦時中の日系人の悲しみが伝わってきた。二人の息子が日本軍、アメリカ軍の両方に入隊した母親の気持ちはどんなにつらかったことだろう。	来館時間が充実するようにする。 ・展示開催博物館によって展示内容や常設展とのかかわりで活動内容も修正していく必要がある。 ・見学中の子どもをつぶやきや姿を記録し、子どもの関心や意識をみとる。 ・時数にゆとりがある場合、見学後に話し合ったり、見学記録をまとめたりする時間をとる。
6 ・ 7 時	●日系移民の現在と日本について考えよう。 ・移民先はハワイやアメリカだけなのだろうか。（資料2-6） ・南米や東南アジアや中国大陸にも移民していたことがわかった。 ・なぜ日系人の子孫、二世、三世が今日本に来ているのか。 ・日本に戻ってきた日系人はどのような暮らしをしているのか。 ・日系人は日本人なのか外国人なのか。 ・日系人の文化はどのようなものだろうか？ ・移民した国によって経験や現在の生活がまったく違う。 ・自分のそばに移民をしてきた外国人がいたらどうしたらよいか。 ●日本にもいろいろな人がいるのではないかな。 ・在日外国人とはどのような人々なのか。（資料2-7） ・自分の本当の名前を隠して日本の名前で暮している人々がいるのはなぜだろう。 ・在日外国人や日系人にとって日本はくらしやすいか。 ・アイヌの人々はどんなことを考えているだろうか。 ・「文化的に様々な人がいる社会」（＝多文化社会）とはどんな社会か。 ・多文化社会に生きるために。	・日本の多文化的状況については駒井洋編『日本のエスニック社会』明石書店、1996年、岡村太郎『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』明石書店、2000年等参照 ・平成11年度現在、海外在住日系人口は約250万人である。在日日系人は約23万人である。 ・1999年末現在日本の外国籍の人口は約156万人で全人口の1.4%である。 ・学級や学校に在日外国人児童が在籍する場合、話題のあげ方に留意すると共に、積極的に授業づくりに生かしていきたい。
8 ・ 9 時間	●学習したことを表現して教室博物館を作ろう。 新聞パネル、ビデオ放映、インターネット、ポスター、文学作品、その他絵画作品などをつくって、教室博物館を開こう。 ・日本からの移民の足跡を物語風にして展示をつくろう。 ・ハワイの日系人について大きな1枚新聞にしてパネル発表をしたい。 ・世界に生きる日系人のことを紙芝居や本にまとめたい。 ・日系移民の経験や日本でくらす日系人を劇にしたい。 ・「多文化社会に生きる」というテーマでインタビュー集をつくってビデオ放映コーナーをつくりたい。 ・ベントウからミックスプレートに変化する様子を紙粘土で作ってみたい。 ・「戦時中の日系人」というテーマでコーナーをつくりたい。 ・博物館にもう一度行って詳しく調べたり話を聞いたりしたい。 ・博物館の人にお礼状を書いて、教室博物館に招待しよう。	・博物館見学に保護者の参加を呼び掛け、教室博物館に保護者からの出典を呼び掛けていく。「総合的な学習の時間」を通して学びを開いていくことになると同時に、「総合的な学習の時間」の取り組みそのものやよさについて学校内や保護者に示す場となる。 ・時数にゆとりがあれば制作活動や表現活動の時間を十分にとりたい。

評価：

＜子ども＞①日本からハワイへ多くの人が移民したことを知り、多文化社会ハワイに生きる日系移民の生活の変化や人々の願いについて知り、現在日本で進展している多文化化について考えることができる。②ハワイ日系移民について、博物館展示、資料などから調べ、調べた過程とそこでの考えを適切な方法で表現する。

＜教師＞①博物館展示を効果的に活用したカリキュラムを作成し、授業と展示見学が子どもの一連の学びとして位置づくよう授業を構想し実践することができたか。②日本からハワイへ移民した人々の経験について示し、それについての子どもの感情や思考をとらえ、授業をつくることができたか。また、子どものつぶやきや思考の中から、多文化社会への視点に発展させて身近な問題として考えるように学習を構成することができたか。

6. 結語ーグローバル教育と多文化教育の結合可能性ー

以上、国際的な博学連携を生かしたハワイ日系移民に関する単元開発を行った。先行実践での子どもの思考からも明らかなように、「移民」の学びを通して世界に生きる日系人についての共感的理解を深める中で、子どもたちは多文化共生の現実気づき、そこから異文化を受け入れようとする資質が育つのである。本研究においては、このような子どもの育ちに焦点化して、グローバル教育と多文化教育の結合という視点にたって単元開発を試みた。

ロン (X. L. Rong) は、移民史を学習することの意義について、「移民について教えることは、生徒にアメリカがいかに、またなぜ過去においても現在においても多元的な国家であり、これからも多元的な国家であり続けるかを理解させることができる。移民史はこの国における自由、平等、公正、個人の権利、人間の尊厳といった基本的な民主主義の原理を守るための大きな歴史的闘争を具体的に示してくれる。」⁽⁹⁾と述べている。ここで取り上げた日系アメリカ人の歴史的経験は、まさにロンのいう「自由、平等、公正、個人の権利、人間の尊厳といった基本的な民主主義の原理を守るための大きな歴史的闘争」の具体例であるといえる。このような過去における日系移民の歴史的な苦悩と闘争の歴史を理解することは、日本の中で歴史的に差別を受け、自由や平等や公正といった人間の権利の獲得のために闘ってきた在日外国人への共感的理解と共生に向けての行動形成にとって意義があると考えられる。

21世紀は「グローバル化し相互依存性を増しつつある世界を前にして、グローバルな見

方やグローバルな価値の実現を重視して意思決定し、時にトランスナショナルな行動のできる」⁽¹⁰⁾地球市民としての資質（Global Citizenship）に加えて多文化社会の中で異なる文化を受容し、尊重し、それとの共生に向けて行動できる市民としての資質

（Multicultural Citizenship）の両方が求められる。そこで、21世紀に求められる新しい市民的資質の育成をめざして、グローバル教育と多文化教育の結合が叫ばれている。⁽¹¹⁾その中で、日系移民史についての学習は、ヒトの国境を越えたグローバルな移動とそれに伴う世界的な規模での相互依存関係を考えるグローバル教育と一国家（地域）内における多文化の共生を考える多文化教育の結合の可能性を示している。

<註>

- (1) この巡回展示は、その後2001年4月19日から8月28日まで大阪の国立民族学博物館で開催され、2002年には広島県立美術館及び江戸東京博物館で開催予定である。
- (2) S. Castles & M. J. Miller, *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, Macmillan, 1993.（関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会、1996年、8-9頁。）
- (3) 国際理解教育の文脈の中で日系移民を扱った最近の実践として次のものあげられる。藤原孝章『外国人労働者問題をどう教えるかーグローバル時代の国際理解教育ー』（明石書房、1994年）。金城宗和「複合社会を志向する『国際理解』教育をめざしてー文化的多元主義を尊重するアイデンティティ形成のこころみー」（帝塚山学院大学国際理解研究所編『国際理解』26号、1995年）。
- (4) 本展示は、全米日系人博物館のハワイの諮問委員会によって企画され、1997年にホノルルのビショップ博物館で公開され、ロサンゼルス全米日系人博物館を経て、ハワイ各地を巡回し、来日した。この展示のもつ意味については、以下を参照のこと。矢口祐人「弁当からミックス・ランチへー博物館とハワイ日系移民史の表象ー」国立民族学博物館『地域研究論集』Vol.3 No.1, 2000年、59-73頁。森茂岳雄「日系アメリカ人をめぐる歴史展示の多文化ポリティクス」国立歴史民俗博物館『歴博』No.103, 2000年、6-10頁。
- (5) Japanese American National Museum, *Japanese American Curriculum Framework*, 1999.
- (6) Japanese American National Museum, *From Bento to Mixed Plate: Americans of Japanese Ancestry in Multicultural Hawai'i, Educational Materials*, 1997. 尚、本キットの授業案部分については、森茂岳雄編『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店、1999年、252-277頁において訳出した。
- (7) 森茂岳雄、中山京子、川崎誠司『日系アメリカ人の歴史ーアメリカに渡った日系移民の歩みー』全米日系人博物館、2000年。
- (8) 沖縄県立博物館教育普及課「特別展『日系移民1世紀』展教育プログラム実施要領」2000年。
- (9) Xue Lan Rong, 'The New Immigration: Facing Social Studies Professionals,' *Social Education*, Vol.67, No.7, 1998, p.389.
- (10) 魚住忠久『グローバル教育ー地球人・地球市民を育てるー』黎明書房、1995年、97頁。
- (11) James. Lynch, *Multicultural Education in Global Society*, Falmaer Press, 1989. John. J. Cogan, 'The Interface between Global and Multicultural Education: A Search for New Meaning,' 日本グローバル教育学会『グローバル教育』Vol.2, 1999年、56-69頁。

<資料1-1>城東小学校 子どもの感想

・おばあちゃんが台湾に移民した人で、今も移住している。移民した人たちはただ移民をしたのではなくて、いろんな理由があって移民をしたことがわかってよかった。(女子)

・移民の意味を聞いた時は、「どうして移民したんだろう。移民をしたら楽だったのかな。」と不思議な気持ちでした。でも、学習をして初めて「移民はとても苦労していた。」ということを知り、あらためて移民の大変さを知りました。特に、ハワイ移民が、とてもきびしい労働をしながらも、賃金を母国に送ることを怠らなかったことがすごいと思いました。私が移民をしたら差別をせずにふつうに接してほしいし、近くに移民してきた人がいたら、ふつうに接していきたいと思う。博物館でたくさん調べていくうちに、資料さがしが楽しいと思いました。(女子)

・ハワイ、日本の文化が混ざり、いろんなものや言葉ができたことおどろきました。自分が移民をしたら、その国のマナーや言葉、食べ物のことを教えてほしいし、沖縄に移民してきた人がいたら、ここの生活をくわしく教えてあげたい。始めは、移民した人たちは別に自分に関係ないし、なんで移民したかなんて知りたくもないと思っていたけれど、とても苦労して、つらい思いをして移民生活をして、しかも沖縄の人なんてとても身近じゃないかと思い、同じ人間なんだから知らないといけないうんじゃないか、と思うようになりました。(男子)

・いみんの事はテレビで少し見て知っていた。自分達の街の様や行動が全然違うところがすごいと思った。博物館では移民した人たちが使っていたものやようすがたくさん分かったし、わからないことも優しく教えてくれたので良くわかった。とてもよかった。今まで世界の歴史などそういうことに興味はなかったけど、この学習をして移民の事がよくわかりました。そして、世界の歴史についてもっとしらべる気になりそうです。(男子)

・最初、移民って何だろうと思いました。一回も耳にしたことがありませんでした。でも、博物館などで調べて、知らなかったことがいろいろわかりました。今では移民って何か聞かれても大丈夫です。総合の時間で話を聞いているだけでは何も分かりませんでした。でも、いろいろ調べて、また一つ分らなかったことが分かるようになりました。(女子)

・移民は日本語が通じないのにそれ乗り越えて自分達の言葉をつくっていったところがすごいと思った。博物館にはいろんなものがあったたくさん調べることができたり、博物館の人がいろいろ教えてくれてよくわかった。この学習をする前は先生が言ったことを調べるだけで楽しくなくてやる気がしませんでした。でも学習をして自分はずきなことを調べられるからやる気ができるようになった。(女子)

<資料1-2>大名児童館対象の博物館活動

活動名と場所	活動のねらい	活動内容	準備するもの	留意点
①本を作ろう (ミニテーブルがある部屋)	本づくりを通して展示を見た自分の思いや知ったことを表現する。	展示を見て心に残ったことについて展示物を手がかりにして6ページの本を書く。	本づくりに使用する画用紙(印刷したもの)	展示を見て内容を決めてから作業にかかるとで時間にゆとりが必要
②Q&Aをカードづくり(展示場全体)	展示を見て関心をもった項目について、自ら問いをたてて調べてまとめる。	展示物について感心をもった事柄や疑問について博物館の人に話を聞いたり調べたりしてカードにまとめる。	ラミネーター 画用紙 カード見本	
③フォトアクティビティ(展示場全体)	一枚の写真から日系移民の経験をさぐり、対象人物を共感的に理解する。	館内にある展示物から興味がある写真を選んで、その写真について博物館の人に話を聞いたり調べたりして、新聞記事を書く。	見本フォトアクティビティシート・インスタントボラロイドカメラ・児童図書	博物館展示写真を新聞記事に含めたい場合は博物館側の許可を得ること。
④ハナハナウエアを着てみよう(労働着展示ブース前)	労働着に着目することにより、移民当時の労働条件を共感的に理解する。	実際に労働着を展示をヒントにしがら身につけ、労働環境を考える。また、日本の農村の労働着との比較をして、多文化社会ハワイを考える。	子供用農作業着・日本の農作業着写真・インスタントボラロイドカメラ	着方の指導など、博物館学芸員の協力を得るとよい。
⑤世界に広がるウチナンチュマップをつくらう(2階パネル前)	地図作りを通して沖縄から世界に渡った人々のことを知り、その広がりやウチナンチュの力強さを実感する。	2階「世界に広がるウチナンチュ」パネルを参考にしてワークシートを活用しながらマップをつくる。	画用紙(世界地図を印刷したもの)資料「海外のウチナンチュ」	パネルを写すだけでなく、2階の展示からその移民先の国のエピソードも記入するように声掛けをしたい。
⑥ハワイのいろいろな言葉調べよう(展示場全体)	ハワイの言葉の中には日本をはじめとする諸外国からの移民の文化の影響を受けていることを知る。	「ハワイのいろいろな言葉」(全米日系人博物館作)や展示、資料などから諸外国の移民に由来する言葉を探し、ワークシートにまとめる。	教育キットの中の「ハワイのいろいろな言葉」資料、ワークシート	

<資料2-1>ハワイ在住日系人出身県上位順位表（1924年）

	ホノルル	オアフ島	マウイ島	カウアイ島	ハワイ島	計
1位	広島 3461人	広島 1095人	広島 1182人	広島 1032人	広島 2492人	広島 9384人
2位	山口 3306人	山口 925人	沖縄 905人	山口 868人	熊本 1841人	山口 7481人
3位	熊本 1947人	沖縄 823人	熊本 760人	熊本 400人	山口 1543人	熊本 5763人
4位	沖縄 1104人	熊本 668人	山口 747人	沖縄 391人	沖縄 1124人	沖縄 4468人
5位	福岡 929人	新潟 419人	福島 366人	福岡 191人	福岡 569人	福岡 2160人

（沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容』1998年より作成）

<資料2-2>主な移民会社と取扱移民数(1898-1908年)

移民取扱人	所在地	創立年	取扱移民数
海外渡航株式会社	広島	1894年	13975人
熊本移民合資会社	熊本	1898年	12020人
日本移民合資会社	神戸	1896年	7992人
東京移民合資会社	東京	1898年	7731人
神戸渡航合資会社	神戸	1894年	2993人
広島移民合資会社	広島	1901年	2893人
小倉商会	大阪	1894年	3431人

*小倉商会については1893-1896年
（今野敏彦編『移民史Ⅲ』新泉社、1986年及びA.T.モリヤマ『日米移民史学』PMC出版、1988より作成）

<資料2-3>プランテーション作業着

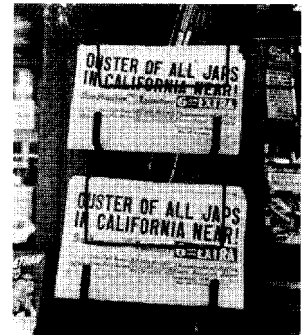


<資料2-4>太平洋戦争開戦時に受けた差別

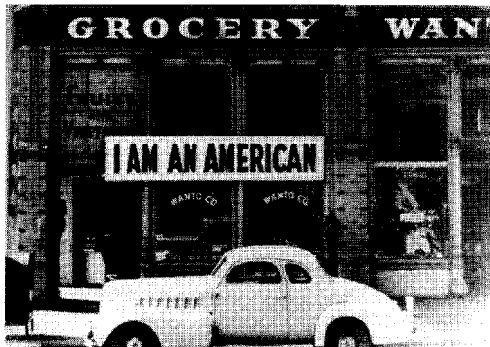


日本軍の真珠湾攻撃のあと、多くの商店が日系人を締めました。
「ジャップは入るな! ドブネズミめ。」
店の入り口に、敗戦をむかしたにこぼれかかっています。

（『図説ハワイ日本人史：1885-1924』ビショップ博物館、1985年）



「カリフォルニアの近辺から、すべてのジャップを追いだせ!」
「サンフランシスコ・エグゼミネー」紙の大見出しは、「ジャップ」というきつななことで、日本人にたいする偏見をあらわしました。



日本人が経営する食料品店の看板には、「わたしはアメリカ人です」と書かれています。まるで「わたしを誤解してください」とさげんでいるようです。



心ない人ひとが、いやがらせにこわした日系人の墓。

（M.O.タンネル&G.W.チルコート著、竹下千花子訳『トパーズの日記ー日系アメリカ人強制収容所の子どもたち』金の星社、1998年より転載）

<資料2-5>強制収容所の様子

集合所から収容所へ

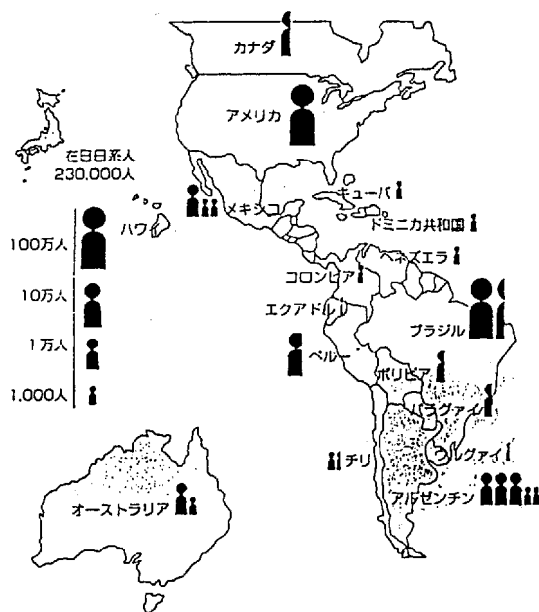
1942年の秋、各地の集合所は閉鎖され、11万人以上の日系人が汽車に乗せられて、戦時転住所とよばれた収容所に送られることになりました。(中略) タランフォラン集合所に住んでいた人びとは、トパーズの収容所へ送られました。カリフォルニア州サンブノ市からユタ州デルタ市まで、おんぼろ汽車で3日間の旅です。乗客たちは、デルタ市に到着すると、こんどはバスに乗せられて、27キロメートルはなれたセヴィア砂漠のまんなかへつれてこられました。

こうして、風のふきさらす砂漠のなかで、たくさんの日系人の子どもたちが、毎日をすごすことになりました。あそんだり、学校へいったり、カプスカウトやブラウニーの活動をしたり、祝日をいったり、…。そのほとんどを、正式には「ユタ州中部戦時疎開センター」という1.6キロメートル四方の有刺鉄線にかこまれた収容所のなかで、砂ぼこりにまみれながら、タール紙でつくったバラックのなかでおこなったのです。

あれはた場所、ふしあわせな身の上におかれても、子どもたちは、砂漠の世界におもしろいものや楽しいことをみつけることができました。親切な先生と、しっかりした両親のたすけで、あるていどの苦しみは乗りこえることができたのです。

(M.O.タンネル&G.W.チルコート著、竹下千花子訳『トパーズの日記ー日系アメリカ人強制収容所の子どもたち』金の星社、1998年、pp.36-38より転載)

<資料2-6>海外在住日系人数(1999年現在250万人)



※近世アジア戦後期にも日系人の数は増えています。

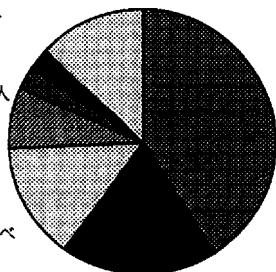
国名	日系人数	国名	日系人数
カナダ	55,000人	ブラジル	1,300,000人
アメリカ	1,000,000人	ペルー	80,000人
メキシコ	12,000人	ボリビア	6,700人
キューバ	800人	チリ	1,600人
ドミニカ(バ)	800人	アルゼンチン	32,000人
ベネズエラ	800人	パラグアイ	7,700人
コロンビア	900人	ウルグアイ	500人
エクアドル	300人	オーストラリア	11,000人

(海外日系人協会調べ)

<資料2-7>在日外国人人口

韓国・朝鮮 約64万人
中国 約30万人
ブラジル 約24万人
フィリピン 約12万人
アメリカ 約4万人
ペルー 約4万人
その他 約20万人
合計 約150万人

在日人口(全人口の1.4%)



韓国・朝鮮
中国
ブラジル
フィリピン
アメリカ
ペルー
その他

1999年度末現在
法務省入国管理局調べ

